

わたしが・棄てた・女

遠藤周作

講談社文庫



講談社文庫

わたしが・棄てた・女

遠藤周作

昭和47年12月15日第1刷発行

昭和48年10月8日第6刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 3930

デザイン 亀倉雄策

製版 豊国印刷株式会社

印刷 豊国オフセット株式会社

製本 加藤製本株式会社

© Shusaku Endo 1972

Printed in Japan

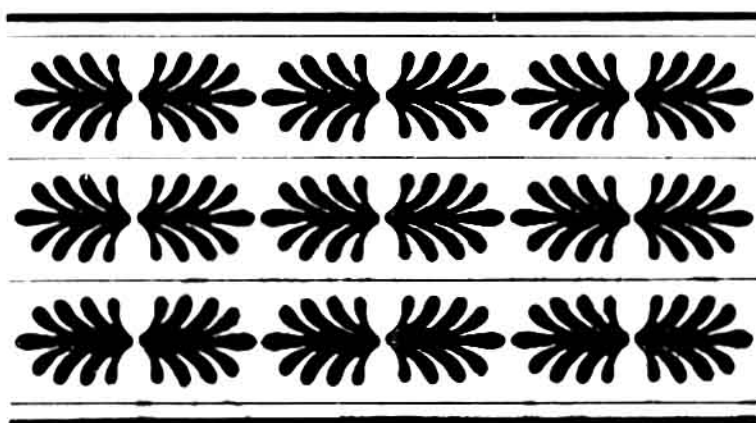
定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

こ文庫

わたしが・棄てた・女

遠藤周作



講談社

目次

わたしが・棄てた・女

五

解説

作家の主題

武田友寿 二五

苦しみへの共感

人生の意味

年譜

二七三

わたしが・棄てた・女

ぼくの手記 (一)

男やもめに蛆^{うじ}がわく……

むかしから言われてきた言葉だが、慎みぶかい読者姉妹^{みなさん}はまさか、若い青年二人の下宿を、のぞかれたことはありますまい。彼等がいかに物ぐさで、その住む部屋がいかに乱雑で、臭氣にみちているかをじかにかいで見たこともありますまい。

しかし、貴女にもし、遊学されている愛すべき兄弟、恋人がおりなら、ある日、突然、その下宿を奇襲されることをお奨めしましょう。襖をあけられた途端、あなたは、

「まア。いやッ。」

顔をあからめ、絶句なさるにちがいない。

この物語は、戦争が終って三年後の二人の若者の下宿からはじまるのだが、女性の読者を多少、辟易^{へきえき}させる部分が出てきたとしても、それは必ずしも、こちらの罪ではない。当時、長島繁男^{ながしましげ}とよくこと吉岡努^{よしおかつとむ}は、独身の学生だったのである。二人が共同生活を営んだ神田の下宿は、さ

すがに蛆まではわかなかったが、夏には自慢できるほどノミがピョン、ピョン飛んでいた。神田の焼けあとや復興したばかりのバラックがみおろせるこの六畳は、それでも下宿難のあの時代に、敷金不要、権利金いらずで、見つけるに随分、苦心したものだだった。

友人、長島繁男は名前だけでは当今の有名な野球選手を連想させるけれども、あのように逞しく、タフで、イカす青年を想像されては困る。彼が裸になると薄い胸に肋骨が哀れに浮きだすのは食糧難の学生生活のせいで、長い間雑炊やスケソウダラしか食べさせられなかったためである。それから、ぼくの場合はもっと悪かった。ぼくは子供の時、軽い小児麻痺をわずらったから、痩せている上に、右足が少し不自由だった。

二人とも学校にはあまり顔を出さなかった。戦後の田舎の事情で親の仕送りもほとんど当にはできず、仕方なくアルバイトに忙しいというのが当時、大半の学生の生活だったが、我々もその例にもれなかった。アルバイトと言っても眼から鼻にぬけるような現在の学生がバンド演奏や学生重役で二万、三万とかせぐのとは違って、やっと出まわりだした電気製品やアルミ鍋を問屋から小売店に配達したり、宝くじやアイス・キャンデーを競輪場や海岸で売ったり、まあ、頭の角帽とはあまり似つかわしくない仕事で、ぼくらのアルバイトだったのである。

(ゼニコがほしい、オナゴがほしい。)

いささか下品な文句で恐縮だが、これがぼくと長島との当時の心情だったと言つてよいだろう。ゼニコ——つまり金はないのは勿論だったが、靴下と共に一番、早く強くなったと言う若い女性^{おんな}は、素寒貧のバイト学生など鼻もひっかけてくれなかったのである。

「ゼニコがほしいなあ。オナゴと遊びたいなあ。」

アルバイトのない日は、ぼくも長島も綿のはみ出た万年床でマスクをかけて寝そべり、そんな溜息をもらしていた。マスクをかけているのは別に風邪を引いたわけではなく、一カ月も掃除をしたことのない部屋は、一寸でも動くときホコリが布団の間から煙のように巻きあがるのだ。だから物ぐさな我々には、マスクをする必要があったわけである。

あれは、秋晴れの、やけに美しい日差しが、ひびの入った窓からこれだけは豊かに流れこんでくる午後のことだった。どこかの遠い家のラジオで笠置シズ子の歌うブギウギがはつきりと聞えてくるほど、空気は澄んでいた。万年床の上であぐらをかきながら、二人は電熱器でこしらえたイモ雑炊をすすっていたが、雑炊のあまい匂いが、万年床からだだよう臭気とまじると、ふしぎに、母親の匂いをぼくに連想させた。空をくりぬいたような秋晴れの青さとこの匂いとは、人を感傷的にさせるものだ。

「おいおい。……それ、食わんのならこちらに寄こさんかい。」

うどん屋からガメてきたドンブリを口にあてた長島は、物ほしげな眼でぼくの顔をみつめた。

「ばっけヤロ。さっきから二匙も余計についだくせに。」

「うむ。何時までもこんな生活をしてはいかんなア。身も心も……よごれていくような気がする。」

長島は意外にセンチなところがあって、この時もこんな話を急にはじめた。

小さい頃、彼は山梨県に住んだそうだが、あの山国では秋になると葡萄つみがはじまる。棚に

みのった葡萄の房が陽の光をうけて褐色の宝石のようにキラキラと光り、菅笠をかぶって脚半をはいた娘たちが手籠に葡萄を入れていくのだそうだ。

「娘たちは背をのばして葡萄棚に手をのばしよる。俺あ、そのころ子供だったがね。若い娘たちが背のびするたびに、着物の裾と脚半との間にのぞき見える真白い膝小僧をうつくしいなア、そう感じたもんだ。秋になると……なぜかいつもその時の膝小僧の白さを思いだす。」

箸を動かしながら、長島は、もう一度当時を心に甦よみがえらせているようだったが、ぼくの眼にも、着物と黒い脚半との間に真白な膝をのぞかせながら、秋の陽の下で背をのばし葡萄をつんでいるピチピチした娘たちの姿がみえるようだった。そういう若い娘と一度でも葡萄つみができたら、どんなに幸福であらうか。

「やッ。いけねえ。バイトの時間だ。」長島は夢からわびしい現実に戻って、「娘よりもまず、金という毎日を忘れとったよ。」

あわてて立ちあがると彼は、油でにしめたような丹前をぬぎ捨てて、押入れにしまったただ一つの古行李に手をつっこんだ。

「きたないなあ。」

犬が土をほじくるように次々とうすよごれたシャツやパンツを放りだして、

「あれエ。ましなのは一つもないのかい。お前あ、風呂屋に行っても体を洗わないからいけないな。」

実はぼくも長島も、この古行李のなかによごれものを放りこんでおく。共同生活の最初の頃は

流石に自分は自分の下着を着用していたのだが、いつの間にかぼくのシャツが彼のシャツとなり、彼のサルマタがぼくのサルマタとなってしまうた。その上、物ぐさな我々は、洗濯の手かずに省くため、一カ月も洗わぬ下着の山から、まだ、よごれのめだたぬものを次々とりだして着るといふ悪習慣がついている。(読者よ。顔をしかめないで頂きたい。だから、ぼくはさきほど言ったのである。ぼくたちだけでなく、あなたの御兄弟、恋人も……要するに男なんて一人暮らしの時は、ほぼ、これとおなじことをやっておるのだ……)

長島と、薄陽のあたる御茶ノ水駅前、雑踏のなかで別れた。彼はこれからあるお屋敷町の邸宅に、犬の散歩という仕事をやりに行くのである。犬といっても馬鹿にはならない。長島の話によると、その邸で飼っているポインター犬は、バターやミルクの入った豪華な食事をあてがわれているそう。戦後の日本人でも、持っている人はやはり、持っている。

ぼくは駿河台をおりて全国学生援護協会の事務所まで出かけた。事務所といえはきこえはいいが、バラック建ての小さな建物に学生たちがひっきりなしに出たり入ったりする場所である。しかし、この小さな事務所ではぼくたちは安直な下宿を世話してもらったり、あたらしいアルバイトを手に入れる。

事務所の前には、秋の弱い日差しをあびてぼくと同じように頬のこけおちた学生たちが並んでいた。まだ復員服をきて角帽をかむっている男、ボロボロの背広を着た男もみな学生なのだった。

列に入って事務所の壁にはりつけてあるバイトの仕事案内を見あげる。宮城前と芝浦で芝生のゴミ集め。これは賃金はいいがむかし小児麻痺にかかったばかりには、なかなか辛い仕事だった。宝くじ売りは労力のわりに金が入ってこないし、家庭教師の口はほとんど東大や一橋のような優秀大学の奴等に占領されてしまう。

思わず溜息をついた時、案内表の右端にちよつと目だたぬ形ではりつけてある小さな紙が目に入った。学生の申込みがあつた紙には、係員が次々と朱筆で斜線を入れるのだが、これにはまだ赤インキはついてはいなかった。

千葉県 桜町にて広告くばり及び軽労働、日当賃金・二百円 交通費別

おそらくこの紙を他の学生も目につけたのだろうが、千葉県まで出かけると言う点で敬遠されたにちがいない。コッペパンやイモ雑炊で凹んだ腹には、千葉県の遠い田舎町までバイトに出かけるのは流石に億劫なのである。

(行くか、行かないか。)

ぼくはポケットに入つた小さなサイコロを手の中に入れてみた。何か決心がつきかねる時、いつもこのサイコロにたよる。戦後の学生としてぼくも自分の運命を自分の意志ではなく、外発的な偶然にまかせるあれな気持ちと諦めがあつた。サイコロの目は偶数と出たので、ぼくは事務の窓に首を入れた。

「ああ、これか。これはと……」

中年の係員は古びたペンを耳にはさんでカードをくつた。

「スワン興業社、神田神保町三丁目の……こりゃア、あんまりまじめな会社じゃ、ないかもしれないよ。」

「ははあ……まじめな会社でもふざけた会社でも良いんです。」

中年係員は一寸苦笑して、黙ったまま雇用主にわたす勤務表の書類を渡してくれた。

神保町三丁目は歩いて十五分とかからない。この一画はやや戦災をまぬがれたのか、ふるびた家が一握りほどの場所に残っている。こわれた板塀の間から夕食を支度しているのか、薪をおったり七輪に火をつけている音がきこえ、ぼくの横を紙芝居の親爺がのろのろと自転車をこいで通っていった。

「スワン興業社は何処でしょうか。」

子供をおぶって家の前にたっている中年のおばさんにたずねると、

「ワン興業だって。」

「ワンじゃない。スワンです。英語で白鳥って意味でしょう。」

「そんなの、この近くにあったかねえ。……十七番地なら、たしか、この裏のはずだけど……」

ぼくはまた七輪の煙がながれ、暗くなりだした路を紙芝居の親爺の自転車のあとからついていった。親爺は横町に折れ、一寸みると不動産屋のような一軒のきたない平家の前で自転車を軌かせながらとまった。

その家がスワン興業社だった。こちらはこちらでスワン（白鳥）という名から白い洋館などを想いうかべていたのだが、白鳥どころか、ゴミ溜から這いでた小鳥こがすのようにホコリでうすよごれ

た家だった。たてつけの悪い硝子戸をあける。土間に電話をおいた机が一つ、その机にオカッパ頭の眼鏡をかけた男が、進駐軍の流れものらしい原色のズボンをはいた足をのせ、こちらを見た。

「金さん、金さん、物品はここにおきますで。」

紙芝居の親爺は自転車から運んできた商売用の絵を土間において、相手を金さんと呼んだ。どうやら、このオカッパ頭は、戦後、東京に進出してきた第三人らしい。

「ヨシ、ヨシ。あした、また来るか。」

親爺はうなずくと硝子戸をガタビシいわせながら出ていった。オカッパ頭は鼻の穴に指を入れて中をかきまわしながら、

「それで、君は、なにかね。」

「実あ、アルバイトの広告を拝見したものですから。学生です。これが学生証です。」

「よし、わかった。君はカクセイ組合からきたのたろ。」

「学生援護協会です。」

「よし、よし、しことは、広告くぱりた。やるか。」

「やります。広告くぱりでしょう。」

相手の発音にまきこまれて、こちらの日本語まで変になりそうだった。

「広告はそれだ。」

大きな金色の指輪をはめた指で、金さんがさした方向は土間の片隅においてあるポスターとチ

ラシの束だった。このポスターとチラシの束を、明日、千葉県桜町やその郊外の村々にはったり配って歩くというのが、ぼくの仕事らしい。一枚をもらって、ぼくは今日と明日との交通費百円をポケットに入れ、スワン興業社を出た。豆腐屋のラッパがどこかでこえ、みじめでわびしい気持ちだった。長島が今日雑炊をくいながら、身も心もよごれていくような気がすると言ったが、その言葉が急に心に甦ってきた。路を歩きながらチラシをみると、謄写版のインキでよごれた紙に下手糞な筆跡で、

「浅草の人気者、エノケンが歌う懐しの名曲 東京のエノケン、遂に桜町に出演」と書いてある。

エノケンといえば、三歳の子供だって知っている。映画や演劇で活躍しているこの喜劇界の第一人者なら当然、六大都市の一流劇場で出演の契約があるにちがいない。いくら何でも千葉県の泥くさい田舎町に旅興行をうつとはまず考えられないことだ。

それに……まかり間違って何かの慈善興行で片田舎で出演するとしても、その興行をスワン興業などというあのあやしげな事務所に委せる筈はあるまい。

(こりやア、インキにちげえねぞ。)

ぼくはあの学生援護協会の頭にもう白いものの混じりだした中年の係員が、

「あんまり真面目な会社ではないかもしれん……」と呟いたのを思いだした。